

舟に參て申けるは君はけさみなと河の下にてかたき七きが中に取こめ參らせてつゐにうたれさせ給ひて候ぬ略と申ければ北の方とかくの返事にもをよび給はず引かついてぞふし給略○中かくと聞給ひし七日の日のくれ程より十三日の夜まではおきもあがり給はずあくれば十四日八島へをし渡るよひうちすぐるまではふし給ひたりけるが略○中北の方やはら舟ばたへおき出給ひてまんくたるかいしやうなればいづちを西とはえらね共月の入さの山のはをそなたのそらとや思しけんまづかに念佛し給略○中南無となふるこゑ共にうみにぞまづみ給ひける略○中昔よりおとこにおくるたぐひおほしといへ共さまをかへるはつねのならひ身をなぐるまでは有がたきためし也されば忠臣は二君に仕へず貞女は二夫にまみへず共かやうの事をや申べき

〔吾妻鏡〕三壽永三年元曆四月廿一日己丑自去夜殿中聊物忿是志水冠者義高平雖爲武衛源朝御

智亡父義仲源已蒙勅勘被戮之間爲其子其意趣尤依難度可被誅之由内々思食立被仰舍此趣於呢

近壯士等女房等伺聞此事密々告申姫公義高妻仍志水冠者廻計略今曉遁去給廿六日

甲午堀藤次親家郎從藤内光澄歸參於入間河原誅志水冠者之由申之此事雖爲密儀姫公已令漏

聞之給愁歎之餘令斷漿水給可謂理運六月廿七日甲申堀藤次親家郎從被梟首是依御臺所御

憤也四月之比爲御使討志水冠者之故也其事已後姫公御哀傷之餘已沈病床給追日憔悴諸人莫

不驚騷依志水誅戮事有此御病偏起於彼男之不儀縱雖奉仰内々不啓子細於姫公之御方哉之由

御臺所強憤申給之間武衛不能遁逃還以被處斬罪云云

〔吾妻鏡〕十四建久五年七月廿九日戊子將軍家姫君自夜御不例是雖爲恒事今日殊危急志水殿有

事之後御悲歎之故追日御憔悴不堪斷金之志殆沈爲石之思給歟且貞女之操行衆人所美諫也

八月十八日丙午姫君御不例復本給之間有御沐浴然而非可有御時始終事之由人皆含愁緒是偏